

放射線科医の動向に関するアンケート調査報告

画像診断医の満足度に関する考察

荏原病院 井田正博, 日本医科大学 高木 亮, イーサイトヘルスケア 松尾義朋

2008年度に放射線科医の動向や意識、満足度に関するアンケート調査が行われ、その集計結果は専門医会のウェブページで公開されている。今回我々のWGは、アンケート総数3,986人分のうち“画像診断を専門とする”とアンケートに答えた2,163人分(54.3%)のデータを用い、画像診断医の満足度に関する調査について報告する。

アンケート調査では、“満足しているか”という設問に対して“1)とても満足している”から“5)とても不満足である”までの5段階で解答が得られている。今回、我々はこのアンケート項目の“1)とても満足している”と“2)やや満足している”の2項目の和を求め、全体数で除した%を計算し、これを満足度%とした。放射線科医全体のアンケート調査における満足度%は67.1%であり、この数字を基準とし、画像診断医の満足度の傾向について以下に考察する。

1. 設立母体別

設立母体別でみたアンケート調査では、最も満足度%が高かったものは画像診断センターの83%、ついで、その他のセンター病院が78%と高く、大学で働く放射線科医の満足度%は、国立大学76%、公立大学77%、私立大学74%と全体の平均から比べて高い傾向を示した。これに続き、民間総合病院や自治体病院などが67~68%とほぼ平均の数値で推移し、満足度%が低かったものは、がんセンター62%、放射線科を主とする診療所が63%、一般診療所が53%であった。

画像診断センターでは、読影に集中した環境で仕事ができることや就業時間をコントロールしやすいこと等が、満足度が高くなった要因と考察される。センター病院は、特殊な疾患について集中した画像診断が行える環境が満足度の高さの要因と考えられる。大学では、スタッフが充実している点、最新の診断装置が導入されやすい点、研究や教育に情熱を持つ医師が多いこと等が満足度の高さにつながったものと考察される。がんセンターの満足度が低かった結果については、スタッフ数が少なくなりつつあるのか、検査業務や画像検査

数の増加に伴い仕事量が急増しているのか、いずれも推測になるがその要因を明確に特定できない。また、診療所で働く画像診断医の満足度の低さも、その背景については不明だが、画像診断医としての専門性を十分に発揮できないことがその要因と推察される。

2. 週労働時間と当直について

週労働時間のアンケート調査では、1)16時間未満、2)40時間未満、3)40時間以上48時間未満…、これ以降8時間毎に分割され、7)72時間以上80時間未満まで、7段階で解答が得られている。“1)16時間未満”については、女性の放射線科医が主婦の仕事しながら数日間働くというような背景が予想され、他のカテゴリーとは同列には扱いにくい。満足度%の結果をみると、1)の16時間未満で66%、2)の40時間未満で64%、3)の40以上48未満で69%と続き、7)72以上80時間未満で68%と、それほど大きな変動はない。週労働時間が長くなると、仕事量が多くなって満足度が下がるという結果にはつながらず、週労働時間が長くても、やり甲斐のある仕事をしていれば満足度に大きな変化がないという結果は明るい材料としてとらえることができる。しかし、今回のアンケートでは仕事の具体的な内容にまで踏み込んでいないため、その実態の判断については慎重を要する。

当直回数と満足度%については、0回で70%、1~3回で67%、4~6回では64%と減少し、6~9回では一度68%と上昇するが、10回以上になると45%と満足度%が激減する。やはり、当直の回数は少ない方が満足度は高い傾向にあり、画像診断医は当直業務よりも日勤時間帯で集中して仕事をしている方が仕事としては適正であるように思われる。これに対して、オンコール(宅直をしながらバックアップをすることと思う)については、0回が69%とやや高いだけで、他1回から、10回以上まで、63%から67%を推移し、オンコール回数が増えると満足度%が下がるような傾向はなかった。オンコールとしての位呼ばれるかということまでアンケートが

表1

(%)

生産性や効率改善のためのシステム、医療スタッフ導入もしくは使用率	全体	国立大学	私立大学	民間総合病院	放射線科医として勤務することに満足している	満足はしていないが不満でもない	不満である
PACSがある	58.3	71.8	66.0	62.1	72.2	21.2	6.6
報告書作成システムがある	67.9	75.7	73.2	72.7	72.2	21.8	6.1
音声入力がある	19.9	24.9	29.1	14.6	72.5	19.2	8.4
医用トランスライバーがある	6.4	5.8	17.0	4.6	77.3	15.9	6.8
放射線科専任クラークがいる	13.2	13.9	18.4	18.8	73.8	19.2	7.0
造影剤の説明・同意書の取得を行う看護師がいる	15.7	6.9	11.7	22.6	68.6	25.8	5.6
造影剤の血管確保を行う看護師がいる	44.8	38.8	32.8	61.4	71.7	22.0	6.3
遠隔読影システムがある	8.9	7.0	5.9	7.5	75.3	20.3	4.4
画像診断医の全体					68.1	24.9	7.0

取られていないため詳細は不明だが、自宅にいることは直営よりも環境が良いことが要因と考えられる。

3. 収入について

収入に関するアンケート調査では、1)400万円未満、2)400万円以上800万円未満、3)800万円以上1200万円未満、以下400万毎に分割されて、6)2000万円以上まで6段階の解答が得られている。満足度%に関しては、1)400万円未満が45%と低く、6)2000万円以上が75%と最も高く、予想される通り高額になるほど満足度%は高くなる。しかし、800万円未満が62%と低いが、800万円以上、1200万円以上、1600万円以上が、それぞれ71%、70%、72%と大きく変わりはないという結果は、収入の上昇だけが満足度を決定する要因ではないことを示唆していると考察される。

4. 生産性や効率改善のためのシステム、医療スタッフなどサポート環境 (表1)

コンピューター断層撮影装置の増加、特にマルチスライスCT、多チャンネルのMR装置の導入に伴い、画像診断専門医の読影量の増大に対処するためには、読影システムおよび業務全体の効率化が求められる。読影に関わるシステムやスタッフの導入状況と満足度の結果を表1にまとめた。画像診断医をサポートしている環境と満足度については、PACSを導入しているが72%、レポートシステムで

は72%、音声出力は72%。放射線科クラーク有りでは74%、テレラジオロジーでは75%と、いずれも平均以上の高い満足度が得られており、診断をサポートする環境が満足度に大きく関与していることと推察された。

「PACS」のような大規模かつ高額なシステムは国立大学で導入率が高い(総合病院以外の民間病院では42.6%)。報告書作成システムについては約3/4の施設で導入されている。一方「トランスライバー」や「クラーク」などの“増員”は私立大学や民間病院で割合が高く、「看護師の血管確保」は民間総合病院で高い。

「同意書に関わる看護師」の項目を除いては、これらのシステム導入により、全体平均よりも満足度は上昇していた(表1 太字部分)。施設管理者は画像診断医の満足度の向上のために、これらシステムの整備が必須と考えられる。ただし全体平均と比較して満足度の割合に極端な上昇はなく、システムの機能や運用に必ずしも満足していない一面も伺える。

5. 年齢別

年齢別にみた満足度%は、20代が75%と最も高く、30代が69~73%と続き、40代が67~70%、50代が63~65%と年齢が上がるにつれて満足度は下がる傾向にある。また、60代では大きく二つに別れた結果を示し、60~64歳では71%と高いが、65~69歳では54%と低くなる。若い世代の満足度が高いこ

とは大変良い材料のように思われるが、年齢が上がるにつれて満足度が下がるという点については、画像診断医に限った問題ではないかもしれないが、今後の放射線科の明るい未来を語る上で十分な考察とその対応策を講じる必要があるかもしれない。

おわりに

今回、画像診断医の満足度という視点から、アン

ケートの集計結果を再考した。このようなアンケート結果から、画像診断医の満足度の傾向が示されたことは大変興味深い。専門医会としては、現状を把握しつつ、画像診断医の満足度が少しでも高くなるように努力し、可能であれば継続的なアンケート調査を行い、放射線科医の満足度がどのような方向に向かっていくかを見守って行きたい。

追加資料：設立母体別勤務実態

今回のアンケート集計により明らかになった設立母体別の勤務実態と収入に関するデータの一部を提示する。比較的、勤務環境の似通ったグループとして国立大学、公立大学、私立大学、がんセンター、その他のセンター病院、国立総合病院、自治体立総合病院、民間総合病院、放射線科を主とする診療所、一般診療所、画像診断センターに分類されるもののみ抽出した。満足度調査の結果を読み解く上の参考として頂きたい。

設立母体別人数分布（調査対象全人数中の比率）

国立大学	13.8%
公立大学	2.41%
私立大学	10.0%
がんセンター	1.75%
その他のセンター病院	2.00%
国立総合病院	2.70%
自治体立総合病院	10.1%
民間総合病院	22.9%
放射線科を主とする診療所	2.45%
一般診療所	7.81%
画像診断センター	3.75%

当直回数の実態：当直回数4回以上の割合

国立大学	15.4%
公立大学	13.3%
私立大学	6.49%
がんセンター	0%
その他のセンター病院	8.82%
国立総合病院	10.9%
自治体立総合病院	2.13%
民間総合病院	6.04%
放射線科を主とする診療所	4.55%
一般診療所	6.08%
画像診断センター	4.35%

週労働時間の実態：週労働時間56時間以上の割合

国立大学	37.6%
公立大学	42.6%
私立大学	44.3%
がんセンター	34.3%
その他のセンター病院	34.3%
国立総合病院	41.2%
自治体立総合病院	8.0%
民間総合病院	30.2%
放射線科を主とする診療所	21.1%
一般診療所	13.0%
画像診断センター	21.0%

収入：年収1600万円以上の割合

国立大学	24.6%
公立大学	19.1%
私立大学	30.0%
がんセンター	5.71%
その他のセンター病院	42.1%
国立総合病院	3.70%
自治体立総合病院	24.7%
民間総合病院	33.7%
放射線科を主とする診療所	50.0%
一般診療所	20.1%
画像診断センター	39.2%